今月のことば　　令和７年（2025）９月　＜No.229＞

心　の　鏡

先日、パナソニック（松下電器産業）の創業者・松下幸之助氏の記念館に行ってきました。わずか一代でパナソニックを世界的な企業に育て上げ、戦後の日本経済を引っ張った一人です。しかし、世に「経営の神さま」とまで言われた松下氏の書籍を見ると、意外な言葉が並んでいます。

『道をひらく』松下幸之助 著より

・神さまではないのだから、全知全能を人間に求めるのは愚の限りである。
・おたがいに神さまではないのだから、先の先まで見通して、すみからすみまで見きわめて、万が一にも誤りのない100パーセント正しい判断なんてまずできるものではない。
・おたがいに神さまではないのだから、一人の知恵には限りがある。それがどんなに偉い人であっても、やっぱりその人一人の知恵には限りがある。
・人間は神さまではないのだから、一点非のうちどころのない振舞などとうてい望めないことで、ときにあやまち、ときに失敗する。・・・・・・

ここからは「神さま」や「スーパーマン」などではなく、何事に対しても謙虚な姿勢で取り組む姿が浮かんできます。

では、なぜこのような姿勢を貫くことができたのでしょうか？…　ヒントになるような文章がありました。

身なりは鏡で正せるとしても、心のゆがみまでも映し出しはしない。だから、人はとかく、自分の考えや振舞の誤りが自覚しにくい。心の鏡がないのだから、ムリもないといえばそれまでだが、けれど求める心、謙虚な心さえあれば、心の鏡は随所にある。**自分の周囲にある物、いる人、これすべて、わが心の反映である。わが心の鏡である。すべての物がわが心を映し、すべての人が、わが心につながっているのである。**

浄土真宗の七高僧・善導大師のことばに、次のようなものがあります。（意訳）

お経に説かれた教えは、鏡のようなものです。何度も読み、何度もその心をたずねれば、真実の智慧を生み出すのです。

私たちには、心の鏡としての「お経」があります。さらに、いつでも取り出せる鏡としての「お念仏」があります。ただ、その鏡に映るのは修正可能なゆがみだけでなく、決して治すことのできない暗い感情や、目を背けたくなるような姿もあるはずです。しかしよく目をこらすと、そんな私を必死で救おうとはたらく阿弥陀さまの姿も見えてくるはず。ときどき、その鏡をのぞいてみましょう。

慧日山 真光寺